

中国華嚴における「入法界品」の声聞衆理解

金京南<東京大学博士課程>

1. はじめに
2. 「入法界品」の会衆
3. 諸師における声聞衆解釈
 - (1) 智儼
 - (2) 法蔵
 - (3) 李通玄
4. 結び

1. はじめに

『華嚴經』は仏が成道後第二週目にさとのままを説いた、一乗だけのための教説であるといわれる。しかし、『華嚴經』の終章である「入法界品」には舍利弗をはじめとする仏の十大弟子が登場しており、この点は經の説時と対象の両点において矛盾を引き起こす。周知のように「入法界品」はもとより独立經典であっただけに独自の構想のもとでなされて当然かも知れないが、經全体を一貫した体系によって説明しなければならなかった華嚴諸師にとって、こうした矛盾は避けられない難題であったに違いない。

本稿では、特に經の対象の問題に限定して、「入法界品」の声聞衆をめぐる中国華嚴諸師の捉え方を比較考察し、それが華嚴思想史の中で持つ意味合いを明らかにしたいと思う。ここでは特に初期に活躍した智儼(602-668)、法蔵(643-712)、そして李通玄(636-730 或いは 646-740)の解釈を中心としたいと思う。

2. 「入法界品」の会衆

本節では、諸師の声聞衆解釈を考察するに先立って、まず經典における声聞衆をみたい。登場する大衆を中心として「入法界品」の内容をまとめると以下のようである。

仏は舍衛城の祇樹給孤独園にある大莊嚴重閣に、文殊・普賢を上首とする五百菩薩¹と、五百声聞、さらに天王たちと一緒にあった。彼ら菩薩・声聞・天王たちは仏に向かって説法を勧請し、仏は自ら獅子奮迅三昧に入る。そこで十方の仏土から十人の菩薩がそれぞれ無数の菩薩衆を伴ってやってくる。

ところで、ここで舍利弗など十大弟子をはじめとする声聞たちは、菩薩衆と同じ場にながらも仏菩薩のさまざまなはたらきに対して見ることも聞くこともできなかった。

その時、仏は菩薩たちを獅子奮迅三昧に安住させようとして、眉間の白毫から光を放つ。すると、菩薩たちはそれを受けて三昧に入り、無量の功德を具える。そこで文殊菩薩が祇樹給孤独園における無量の莊嚴を讃えると、菩薩たちは限りない大悲の教えを身につけ、衆生を救済する。さらに、文殊菩薩が眷属とともに南方への遊行に出発するが、舍利弗は六千²の比丘たちとともにその文殊菩薩のところへと向かう。文殊は彼らに大乘の菩薩道を教え、それを聞くや比丘たちは、「見一切仏境界無碍眼」という三昧を得る。文殊とその眷属はさらに南方へと旅し、覺城の東に辿り着き、莊嚴幢娑羅林に至って、普照一切法界という經を説く。すると、無量の竜王たちがやってきて、人間に生まれ、そのうちの一万の竜王は無上正等覺から退くことのない境地を得る。一方、大智³をはじめとする千優婆塞⁴・大慧光⁵をはじめとする五百優婆夷・善財をはじめとす

¹『六十華嚴』(T9,676a5)『八十華嚴』(T10,319a7)には「五百」、『四十華嚴』(T10,661a8)には「五千」とある。

²『六十華嚴』(686c25)『八十華嚴』(330c24)には「六千」、『四十華嚴』(675c15)には「六十」とある。

³『六十華嚴』(687c21)『八十華嚴』(332a15)には「大智」、『四十華嚴』(677a28)には「大慧」とある。

⁴『六十華嚴』(687c21)には「千」、『八十華嚴』(332a15)『四十華嚴』(677a28)には「五

る五百童子・善行⁶をはじめとする五百童女が文殊菩薩のところによってくる。そこで文殊が彼らに法を説こうとしたとき、善財に気づくのであり、ここから品の主役は善財に代わる。以上の大衆を、智儼・法蔵・李通玄の科文名とともに示すと、次のようである。

<表1> 「入法界品」の大衆

会衆	三師	智儼	法蔵	李通玄
五百菩薩	序分	本会		給孤独園会
五百声聞				
諸天王				
十方からの菩薩衆				
舍利弗などの諸声聞				
(仏の放光)	正宗分	末会		覚城東大塔廟処会
(文殊の出闍)				
舍利弗および六千比丘				
竜王衆				
五百優婆塞				
五百優婆夷				
五百童子				
五百童女				

※ 会衆の数において諸本の異同があるが、ここでは『六十華嚴』にしたがった。

※ 括弧処理した、仏が眉間から光を放つ場面と文殊が善安住樓閣を出る場面は、大衆の区分と直接的な関係はないが、科文を示すために挿入した。

※ 李通玄の科文には前半を指す名称が見られないので、便宜上彼の10処10会説の中の名称を用いた。

百」とある。

⁵ 『六十華嚴』(687c27)には「大慧光」、『八十華嚴』(332a21)『四十華嚴』(677b5)には「大慧」とある。

⁶ 『六十華嚴』(688a7)には「善行」、『八十華嚴』(332b2)には「善賢」、『四十華嚴』(677b18)には「妙賢」とある。

以上から分かるように、「入法界品」において声聞衆の登場する場面は、智儼の科文名でいうと、序分に2回と正宗分に1回である。序分の2回は同じく舍利弗をはじめとする声聞衆であると考えられ⁷、正宗分の声聞とは序分の声聞衆のうち舍利弗だけを指す。さて、それぞれの声聞に関する経の説明をみる。まず、最初の声聞衆、すなわち菩薩衆とともに仏の会座にいた声聞衆であるが、彼らは経によれば、

みな真諦をさとり、如實際を証得している。深く法性に入り、生死の海を離れ、如来の虚空境界に安住する。束縛を離れて一切に執着せず、虚空に遊行する。諸々の仏所において疑いがすべて消えて、深く信じ大海のような諸仏に向う⁸。

とされ、大声聞として称えられることが分かる。ところで、その同じ声聞衆が次の場面では仏菩薩のはたらきに対して全く見ることも聞くこともできなくなるが、その理由に関して経は菩薩との対比を通して次のように述べている。

もともと如来の自在を見られるほどの善根を修習しなかった。また、浄仏土の行を修習しなかった。[中略] これは菩薩の智慧の領域であって、声聞たちの智慧の領域ではないのである⁹。

すなわち、たとえ大声聞であるとしても菩薩の境地には及べないといわれるのである。一方、正宗分の舍利弗は仏の神力を受けて、文殊菩薩の遊行に立つ

⁷ 『六十華嚴』を見てみると、菩薩とともに会座にいた声聞衆に対しては「五百大声聞」(T9,676c9)とし、「舍利弗」や「十大弟子」とはいわない。逆に、次の仏菩薩の神変を見るができなかった声聞衆を指すときは「諸大声聞」(679b28)または「一切声聞大弟子」(679c12)とし、「五百」という表現は見当らない。ところで、諸師によって両者は「舍利弗等五百声聞」や「五百声聞目連鷲子」というふうにとりなして使われていることから、同じ会衆として理解されていると思われる。

⁸ 「悉覚真諦証如實際。深入法性離生死海。安住如来虚空境界。離結使縛不著一切。遊行虚空。於諸仏所疑惑悉滅。深入信向諸仏大海。」(T9,676c10-13)

⁹ 「本不修習能見如来自在善根。亦不修習浄仏土行。(中略) 此是菩薩智慧境界非諸声聞智慧境界。」(T9,679c12-680c11)

ことを見て六千比丘を導き文殊菩薩にしたがうのである¹⁰。

以上から分かるように、「入法界品」に登場する声聞衆は、始めに菩薩衆とともに仏に勧請していたのに仏菩薩の神変を見ることができなくなり、またその中の舍利弗が仏神力を受けて文殊の教化に同参するなど、さまざまな様相を見せている。次に、こうした問題を含めて、華嚴諸師が「入法界品」における声聞衆の存在をどのように解釈しているかについて考察する。

3. 諸師における声聞衆解釈

1) 智儼

智儼は『搜玄記』巻5上、「入法界品」釈中、序分の第4「同聞衆」において、菩薩・声聞・天王の三種の会衆について述べているが、声聞衆については、

この会衆にだけ声聞があるのには二つの意味がある。一つは、法界が[声聞]を包容するのが相応しいことを顕わすためである。二つには、小を廻して大の行に入らせるためである¹¹。

とし、「入法界品」にだけ会衆として声聞が登場する理由を説明する。すなわち、「入法界品」における声聞の存在は、声聞衆を包容するほど法界が広大であることをあらわし、また小乗を廻心させ大乘へ入らせるためである。このような二つの理由はそれぞれ以下のように適用される。

すなわち、智儼は『搜玄記』巻5上、序分の第7「十方新衆集」において、声聞が会座にいながらも聞くことも見ることもできなかったことについて、法

¹⁰「爾時尊者舍利弗承仏神力、見文殊師利童子、以菩薩莊嚴而自莊嚴、出祇林遊行南方。見已作如是念、我今当与文殊師利菩薩俱行。爾時尊者舍利弗、与六千比丘眷属围绕、従自房出来詣仏所礼足辞退、向文殊師利。」(T9,686c22-27)

¹¹「所以此衆独有声聞 此有二意。一、為顯法界攝相応故。二、為廻小入大行故。」(T35,88a-b)

界の深さをあらわすものであるとする¹²。また、正宗分において六千比丘を導く舍利弗については、小乗を大乘へ廻入させる、教化にしたがう智であるという¹³。

このように「入法界品」の声聞衆に関する智儼の解釈はごく簡潔であるが、以上をまとめると、法界の包容性をあげると同時に二乗の廻心の可能性を言及しており、少なくとも会衆としての声聞の存在を否定しているとは考えられない。

2) 法蔵

法蔵は『探玄記』巻18、本会の「序分」において、仏とともに会座にいる菩薩・声聞・天王の会衆をあげるうち、特に声聞衆に関して詳しく述べている。法蔵によると、声聞衆はまだ円教一乗の普賢法へ入っていないので盲聾のようであるという¹⁴。すなわち、舍利弗などの声聞衆は、阿羅漢果を成就し大乘へ廻向する大声聞であるにもかかわらず、一乘法に入ることができないので仏菩薩の神変に対して聞くことも見ることもできないとのことである。しかし一方で、法蔵は

彼らは大菩薩が声聞を示現しているものである。『新訳花嚴不思議境界分』の中で説かれていることのようなのである。すなわち、華嚴の教えの深く勝れていることを顕すために、[菩薩が]盲聾のように示現するのである¹⁵。

¹²「第三辨声聞不共、即顯法界是深。」(T35,88c8) ちなみに、智儼がこの仏菩薩の神変を見ることのできなかつた声聞衆を十方から新たにやってきた菩薩衆とともに「十方新衆集」の項目で扱っていることから、最初から会座にいた声聞衆とこの声聞衆とを区別している可能性について考えてみたが、経文や諸師の「入法界品」釈いずれにも彼らを別の会衆と見るべき根拠は見当らなかつた。脚注7参照。

¹³「初化引声聞、即廻小入大也。(中略)初舍利弗、表從化之智。二此六千比丘下、表所撰機器。」(T35,90c8-12)

¹⁴「解云以其未入円教一乗普賢法故。是故下文如聾盲也。」(T35,442b24)

¹⁵「又釈此等並是大菩薩示現作声聞。如新訳花嚴不思議境界分中説。以顯此法深勝故示現如聾盲也。」(T35,442c) 引用されている『新訳花嚴不思議境界分』とは提雲般若訳『華嚴経不思議仏境界分』(689-692)を指し、その冒頭に「復有無量千俱胝諸菩薩衆。示声聞形。亦皆來集。所謂。舍利弗多羅。」(T10,905b21)とある。ちなみに、又実難

ともいう。このように法蔵は、一方では、たとえ大声聞であるとしても一乘法に入ることができないので会座での仏菩薩の神変を見ることができなかつたとし、もう一方では、それもまた菩薩が声聞の姿をあらわしているものであるとして、二つの説明を行っている。

また、法蔵は同第 2「請分」において、後に仏菩薩の神変を見ることのできなくなる声聞衆がどうして冒頭に菩薩衆とともに会座にいられたのかという疑問を想定し、意法師¹⁶を引用して次の三つに答える。初めに、理からすると異っていないので菩薩衆と同様に勧請することができたが、まだ大なる心を積んでいないのでその次の場面では適応できなかったという。二つには、菩薩衆とともに祇樹給孤独園にいたので同じく勧請するが、普眼がまだ開かれていないので盲目等のものであるという。最後に、実際は菩薩であるので菩薩衆とともに勧請するが、すがたは声聞を現すので盲目のものであるという¹⁷。

この三つの解釈のうち、前の二つによると、声聞衆は道理の側面からすると菩薩衆と一緒にいることが可能であるが、実際には仏の説法が理解できるほどの実践を積んでいない存在とされる。これに対して最後の解釈は、本来は菩薩であるが声聞の姿をあらわしているものであるとし、前の解釈とは矛盾に思われる¹⁸。

陀による別訳『大方広如来不思議境界経』(695-)には「復有無量千億菩薩。現声聞形。亦来会坐。其名曰舍利弗。」(T10,909a)とある。翻訳された年代からして、法蔵が見たのは前者のみであろう。

¹⁶ 典拠未詳。意法師については『華嚴経伝記』巻第三に「魏北臺意法師有疏不知幾卷」(T51,164b)とある。

¹⁷ 「問。准下声聞皆如瞽盲、何故此中而同疑念。答。意法師釈曰、理処不隔故得同疑、未積大心故不应其次。又釈、表同在祇疑故同念請、普眼未開故如盲等。又釈、実菩薩是以同念。跡現声聞是以如盲云云。」(T35,442c26-443a2)

¹⁸ 智儼には「実菩薩」という用語が見られる。たとえば、彼は『五十要問答』「一乗得名意」で、『摂大乘論』の「諸仏の法身が声聞乗や独覚乗とは共通しないとすれば、どういう意趣のもとに仏は、乗は一つであると説かれたのか」に関する釈を趣意する中、「実菩薩」という用語を使う。彼によれば、実菩薩とは、名前は同じく声聞であるが、菩薩が声聞に化したものである(「実菩薩、名同声聞及菩薩化為声聞」T45,536a-b)。しかし、「実菩薩」をもって「入法界品」の声聞を説明する用例は見あたらない。

また、法蔵は同第 6「拳劣頭勝分」において、声聞衆が会座にいらながらも仏の神変を見ることができなかつたことに関して述べている。ここにおいても、「声聞は善根を収めているから会座にいられるものの、それは菩薩の自在なる善根とは異なる別の善根であるので、仏の神変を見るまでには及ばなかつた」¹⁹というなど、前節でみた経の叙述と同様に菩薩衆との対比を行なう一方、「あるいはこれは菩薩の変化してなされたものであり、まさに法の勝れていることをあらわすのである」²⁰といい、菩薩の示現とする捉え方は変わらない。

次に、末会における声聞、すなわち六千比丘を導く舍利弗に関する解釈である。舍利弗は仏の会座において仏菩薩の神変を見ることができなかつた声聞衆の一人であるが、文殊の遊行が始まると六千比丘を導いて文殊のもとを訪ねる。法蔵は、舍利弗もまた大菩薩であるのにどうして菩薩衆とともに会座に留らず離れていくかという問題を想定し、姿は声聞であるからだと答える²¹。このように、法蔵は末会の舍利弗に対しても実際は菩薩であると解釈している。

以上、「入法界品」の声聞衆に関する法蔵の解釈を見た。法蔵は、『華嚴経不思議仏境界分』を典拠に、また意法師の説を導入して、声聞は菩薩の示現したものであって本質は菩薩であるとする。この解釈は本会と末会を通して一貫している。これは、声聞の登場という難題を解決して華嚴の会衆の純粋性を保つことを目的としていたと考えられる。

法蔵のこうした立場は、『探玄記』の中の「入法界品」釈だけでなく総論といえる玄談からも窺うことができる。すなわち、彼は、『探玄記』巻 1 の玄談の「教所被機」において、『華嚴経』の教えを受け入れることのできない者と受けられる資格のある者についてそれぞれ述べている。これによれば、『華嚴経』の教えを受け入れることのできない者(非器)には、真実に違う人(違真)・正義に背く人(背正)・誠実でない人(乖実)・劣った人(狭劣)・仮りの教えに執られる人(守権)の五種があり、受けられる資格のある者(所為)には、真の対象者(正為)・兼ねられる対象者(兼為)・導かれる対象者(引為)・転入する対象者(転為)・やがて受け

¹⁹ 「有善行故得在会。以是別異善行故不見也。」(T35,446b22-24)

²⁰ 「或是菩薩变化所作方頭法勝。」(T35,447b5-6)

²¹ 「問若爾鷲子亦是大菩薩。何不同在閣。答寄迹是声聞故不在彼。」(T35,452a)

られる対象者(遠為)の五種があるとする。ところで、『華嚴経』の教説の対象になれないといったん否定された非器が所為の説明においてすべて収められていることが分かる。しかし、この中で例外といえる存在が一つある。非器の中の劣った人と、これに対応する所為の中の転入する対象者がそれである。まず、狭劣の説明から見ると、

四には、狭劣という非器である。謂く、すべての二乗には広大なる心がないので、またこの器ではない。下の文に「一切の声聞と縁覚とはこの経を聞かず。まして受持せんか。」²²という。また、「舍利弗等の五百声聞はみな盲聾の如く聞かず見ず。」という²³。

とし、二乗は『華嚴経』の対象になれないと述べる。ここで例としてあげられるのが、まさに「入法界品」の声聞衆である。そして、これに対応する所為の四番目の転入する対象者については、

四に転入する対象者とは、謂く諸の二乗は機根が鈍いので、まず共教の大乗に廻入し、二乗の名を捨てて菩薩の称号を得てはじめて、まさにこの普賢の法に入る。したがってこの経を説くことは、菩薩のみのためであり二乗を含まない。(中略)したがって、まさに知らねばならない。すべての二乗は総じて直ちに普賢の法界に入ることがないことを。究竟の説によれば、二乗にして共教の菩薩に廻入しない者なく、あの菩薩にしてこの普賢の法に入らない者はない。したがって展転すれば、みなこの法の器でない者はないのである²⁴。

という。すなわち、『華嚴経』は菩薩だけのための説であるから、二乗がこの法界に入ろうとするなら、まず大乘へ廻入して菩薩の称号を獲得しなければなら

²² 「一切声聞縁覚不聞此経。何況受持。」「如来性起品」(T9,630a9)

²³ 「四狭劣非器。謂一切二乗無広大心亦非此器。下文云、一切声聞縁覚不聞此経。何況受持。又舍利弗等五百声聞、皆如聾盲不聞不見。」(T35,116c17-21)

²⁴ 「四転為者。謂諸二乗以根鈍故。要先廻入共教大乘、捨二乗名得菩薩稱。然後方入此普賢法。故説此経唯為菩薩不撰二乗。(中略)是故當知、一切二乗総無頓入普賢法界。依究竟説、無有二乗而不廻入共教菩薩、無彼菩薩而不入此普賢之法。是故展転無不皆是此法之器。」(T35,117b8-20)

ないのである。

法蔵は以上のような機根をめぐる論理を通して、あらゆる存在を包容できる『華嚴経』の同教的側面を強調しようとしたと思われる。しかし、二乗の場合、菩薩位へ転入してはじめて法界に入ることができるというので、二乗そのものを認めているわけではなく、結局二乗に対する否定は変わっていないことが分かる。

3) 李通玄

最後に李通玄の声聞解釈を見る。まず、舍利弗など五百声聞に関してである。彼は『新華嚴経論』巻32「入法界品」釈の第5「釈所集之衆意」において、声聞衆を「この法界の不思議なる神通力を聞くのも見るのもできないことを示現する大衆」²⁵と定義し、法蔵と同じく、声聞衆を菩薩の示現として説明している。

そして、彼は『決疑論』巻1の下において、菩薩の示現する内容について「過去世に信の種がなかったこと、そのため、今この一乗の智の境界が聞けないのが、まるで盲聾が目当たりにながらも見るのも聞くのもできないことのようにである」²⁶という。

また、彼は『新華嚴経論』巻32第6「釈文釈義」において、

このように声聞が如来の变化神力境界や菩薩衆海を聞くことも見ることもできなかったことを示したのは、諸々の実声聞を廻心させ、如来の大願・大智・大慈悲を植え、常に生死にいながら広く衆生を利益するようにするためである²⁷。

と述べ、示現する目的を明らかにする。すなわち、菩薩が声聞を示現する意図を声聞の廻心にあるとして、大乘の実践を促す。このように声聞の廻心の可能

²⁵ 「五百声聞衆。是示現不聞不見此法界不思議神力衆。」(T36,944c25-26)

²⁶ 「舍利弗等五百声聞。示現往世無信種。不聞此一乗智境。如盲若聾對面不見不聞。」(T36,1020b)

²⁷ 「如是声聞示同不聞不見如来变化神力境界菩薩衆海、令諸實是声聞廻心種如来大願大智大慈悲、常処生死広利衆生故。」(T36,945c9-12)

性を認めているという点において、菩薩の示現を主に法界の奥深さをあらわすためであるとする法蔵に比べて、法界の広大さと小乗の廻心を同時に説く智儼の方に近いと思われる。

次に、六千比丘を導いて文殊に向う舎利弗については、同巻6に、

舎利弗のような者は影響声聞であり、実際の声聞ではない。すなわち、彼はすでに仏位にいたっているのに、[声聞の姿を示現して]世俗に入り凡夫に接するのである²⁸。

とする。すなわち、この舎利弗もまた実際の声聞でなく、仏位の菩薩でありながら、声聞を示現することによって世俗に入り凡夫とまじわるのである。

彼が以上のように声聞を解釈することは、法蔵と同様に『華嚴経』の会衆の問題を強く意識していたからであると思われる。例えば、彼は『新華嚴経論』玄談の「依教分宗」において、

『華嚴経』の中の来衆は、みな如来乗に乗って仏智果徳自体法身に普賢行を具える。影に随って十方刹海の一切道場に現れて、還って如来所乗の本法を成す。三乗根機をもつ者は一人もない。[三乗の]根機があるといっても、盲聾のように、知覚できない。あたかも盲人が日月に対するかのようであり、聾人が天の音楽を聞くかのようである。²⁹

とし、一乗のみが『華嚴経』の会衆であることを述べる。こうした考え方が前提となっているので、法蔵と同様に「入法界品」の声聞を菩薩の示現として説明するのである。

²⁸ 「如舎利弗即是影響声聞。非実声聞也。即是已登仏位。入流接凡。」(T36, 753c19-20)

²⁹ 「如華嚴経中所有来衆。皆是乘如来乘仏智果徳自体法身。具普賢行。而随影現十方刹海一切道場。還成如来所乗本法。無有一箇三乗根機。設有根機。如盲如聾。不知不覚。猶如盲人對於日月。猶如聾人聞天樂音。」(T36, 724b)

4. 結び

以上で、「入法界品」の声聞衆に関する智儼・法蔵・李通玄三師の捉え方を考察した。以上の内容をまとめると次のようである。

智儼は、「入法界品」における声聞の存在を、声聞を包容できるほどの広大な法界をあらわすため、また小乗を大乘へ廻入させるためという法界と教化の両側面から解釈しており、『華嚴経』の対象として否定しない。

一方法蔵は、「入法界品」の声聞衆を菩薩が声聞の姿をあらわしたのものとして解釈する。そして、場面によって、たとえば仏菩薩の神変を見ることができなかった場面においては声聞として、仏の会座にいて勧請する場面においては菩薩として捉えている。また、菩薩が声聞の姿をあらわしているのは、『華嚴経』の教えの勝れていることをあらわすためであるとし、智儼に比べて法界の側面を重視しているようである。法蔵のこういう捉え方は、『華嚴経』の会衆として相応しくない声聞の存在を強く意識し、会衆の純粋性を維持しようとした結果であると思われる。しかし、これは声聞そのものを避けての主張であり、したがって法蔵において声聞と法界との関係という問題は依然として解決されていないと考えられる。

李通玄は、「入法界品」の声聞を菩薩の示現をもって説明する点においては法蔵と変わりがない。しかし、声聞の姿をあらわす意図について声聞を廻心させてひいては衆生を利益するためであるとしていることから、示現の目的を主に法界の広大さをあらわすことに置く法蔵に比べて、法界と教化の両面を同時に説く智儼に近いと思われる。

こうした三師の声聞に対する解釈は、華嚴思想史において声聞を一乗の枠内に受容しようとした努力の痕跡として大きな意味をもっているといえる。また、これは後の華嚴思想において多大な影響を及ぼしているが、こうした観点から澄観以後の解釈については今後の課題としたい。